

装飾古墳の画題からみた地域間交渉の一側面

— 熊本県広浦古墳の石棺に表された親子大刀 —

門 田 誠 一

序 言

文字は本来たんなる記号ではなく、形象のもつ本性を担うことによってその表徴をこえた本質や心性をもつ。人が己が手で描いた絵画や掘り刻んだ文様や装飾にも、また往昔の声ならぬ思いが満ちているはずである。しかしながら、我々は彼らが描いた図文や構図を異なる視点でしか見ることがかなわず、それが語ろうとする多くについては本来の意味するところを見逃している場合も多いであろう。

本論では装飾古墳の集中する九州中部のなかでも、とくに不知火海沿岸地域に濃密に分布する大刀や刀子などの武器の構図をとりあげ、朝鮮半島の三国時代墳墓から出土する武器にみられる大刀と刀子を組み合わせた武器との対照検討のなから、その構図に込められた本源の意味を読み解くことを試みる。

1 広浦古墳と装飾石棺片

大小の島影が重なって美しい景観を織り紡いでいる天草諸島のなかでも、宇土半島に寄り添うようにして浮かぶ千束島の旧・維和村（現在の熊本県天草郡大矢野町）字広浦で本稿で考察の対象とする石棺は発見された。大正七

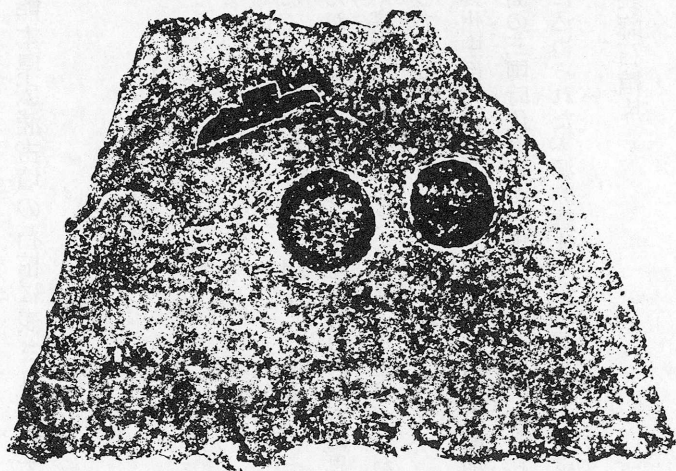
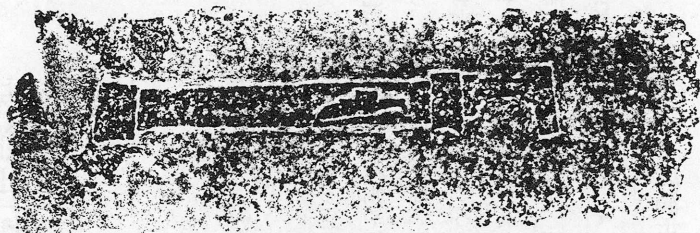


図1 広浦古墳石棺片

(上：「濟々囊第一石」 中：「維和村第一石」 下：「濟々囊第二石」)

年（一九一八）二月の工事中に出土したこの石棺に伴う遺物は知られていない。発見当時の觀察者の談によると元は小規模の墳丘をもった円墳であつたらしく、その内部には横穴式石室があり、さらに三基の組合せ式石棺ないしは石障があつたと推定される。⁽¹⁾

もつとも完好な状態で発見された一例は底板のない組み合わせ式石棺であつて、内法では長さ約一九一センチ、幅約六一センチ、高さ約五八センチに復元されている。

この石棺材のうち二枚に浮彫りによる裝飾文様がみられた。報告書の執筆段階で熊本市の済々黌中学に所在した二点をそれぞれ済々黌第一石と第二石としているが、本論もこの表記にしたがつて簡略に次章での考察に資する部分を摘録する。第一石とされたものは側壁の上半部とみられるもので、長さは石棺の復元に記した通りであるが、厚さは一端においては約四・五センチから厚い部分では約六センチと不揃いである。塗布された赤色顔料（報告書では丹）が薄いながらも全面に残っていることから、こちらが石棺の内面になると考えられている。この面には輪郭を浅く彫りこむ方法によつて一振りの大刀が表現されており、報告文では水平に横たえたさまという形容がされている。この大刀は柄頭が「丁字形」に表されており、鞘は幅広いもので、鞘口と鞘尻を幅広くとつた表現がなされている。報告文では鏢のない大刀の形状は戦闘などを目的とした実用品ではなく「日常生活に用いた利器の形式を遺存せる」ものであり、鞘も形状みて皮革製もしくは木製のようにだとみている。（図一）

この大刀の鞘口に接して、鞘上に長さ約一四センチの刀子が表現されており、柄の形態は大刀のそれと共通していて、表現からみて刀子の鞘も皮革製もしくは木製の原品を表現したものと考えられている。また、大刀が実大であるとみられることから、刀子もまた実物大を模しているとする報告文の見解は適確なものと思われる。さらに報告文では、これらの大刀および刀子の表現は、実物を置いてその輪郭をなぞつたことによつて、このように写実的なものが生まれた可能性を示唆していることも付言しておこう。

これらの他に報告文では維和村第一石および第二石としてゐるものがある。第一石は一本の刀子の下部に二個の円板が彫刻されており、報告文では坏のような円形の土器または鏡を意味するのではないかとされているが、同様の図文が垂下された例から鏡を表したものとみられるにいたっている。また、第二石には四角形と円を結合させたような平面形の文様がみられたが、これについては何の表現かはその後ほとんど論及されたことがない。このような装飾ある石棺はのちに広浦古墳出土として知られることになり、報告文で「済々黻第二石」とされたものは現在熊本県立美術館装飾古墳室に展示されている。

広浦古墳の年代については、石棺片以外には伴出遺物などが知られていないため、詳細に論じることが困難であるが、近隣の装飾古墳などとの相対的な吟味からは五世紀前半頃に比定する見方が示されているように、小異はあるがほぼ五世紀前半から中頃に築造時期の一端がもとめられている。^③

2 広浦古墳の石棺装飾に対するこれまでの解釈

広浦古墳の装飾石棺の図文に対する解釈や見解を概観し、以降の考察にそなえることにしたい。

報告文を執筆した浜田耕作氏は同じく不知火海に沿った地域に存在する千金甲三号墳（図2の1）や石貫ナギノ横穴群（とくに八号横穴を指すと思われる）（図2の2）などに大刀の装飾が認められることにまず注目している。そして、とくに刀子については当時の生活必需品であることによつて副葬品とされ、それが装飾表現に代えられたものかと憶測しながら、「攘魔」すなわち魔除けあるいは辟邪のための「護り刀」として、死者に手向けられたものである可能性も示している。^④

これに先立つて『肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴』のなかで、浜田氏はとくに肥後地域の古墳や横穴にみられる刀剣は日常生活に必要なだけでなく、死後にも「座右に具ふるの意を以て」表現されたものであり、盾などと

同じく辟邪および護符のような意味をもっているものと推測した。⁽⁵⁾

ともに五世紀代前半頃の築造とされる大鼠蔵東麓一号墳（図2の3、7）とともに広浦古墳を紹介した乙益重隆氏はこれらの古墳に表現された器物が死者に対する副葬品の代用として彫刻されたものであると位置づけた。⁽⁶⁾ また、乙益氏は表現方法の特徴から、大刀については鹿角装であるとみなし、刀子については皮鞘であると推測している。⁽⁷⁾

斎藤忠氏は広浦古墳石棺の大刀および刀子そのものには直接言及していないが、石貫ナギノ横穴の入り口に刻されている刀子は明らかに呪的な要素を示すものであると述べている。⁽⁸⁾

高木正文氏は石棺の上に甲冑や刀剣が載せられていた上の原遺跡四号箱式石棺（熊本県菊池郡西合志町）などと大鼠蔵東麓一号墳⁽⁹⁾の石棺装飾の武器や鏡なども副葬品を棺内に納めるのと同じ目的で表されたものであると述べ、広浦古墳の石棺装飾も大鼠蔵東麓一号墳と共通し、それらの影響下にあるものとみている。⁽¹⁰⁾

白石太一郎氏は広浦古墳や大鼠蔵東麓一号墳の石棺装飾にみられる武器や武具が鏡とともに彫刻されていることから、辟邪の意味をもったものと推定している。さらに、これらは前期後半の古墳墳頂において首長霊が宿る聖なる空間であることを示す家形埴輪群を守るように樹立されている盾・靱などの器材埴輪と共通の意味をもち、石棺系の装飾古墳にみられる直弧文・鏡・武器・武具などは死霊を封じこめるとともに一方では死者を邪悪なものから守る辟邪の意味で用いられたとみる。そして、死霊を封じ込める意味をもつとは考えがたい武器・武具が遅れて加わるという点から時代とともに次第に辟邪の意味が重視されていくようになったという見通しをたてている。⁽¹¹⁾ このようにこれまで広浦古墳を含めた不知火海沿岸の石棺系装飾みられる武器・武具は鏡とともに副葬品を表現したものであるとか、さらにそれが墓内へ邪悪なものへの侵入を防ぐための辟邪の意味をもったとする見方が主流であった。

このような装飾古墳としての位置づけや吟味とは異なり、大刀や刀子そのものとしての分析は少ない。そのなか

で、小林行雄氏が広浦古墳石棺裝飾の大刀を鹿角装として、古墳時代前・中期を通じて「本来わが国に行われたもの」と位置づけ、日本の古墳時代に独特の大刀の典型として取り上げている。¹²⁾

その後、藤ノ木古墳出土の大刀と刀子の検討の過程で関川尚巧氏は広浦古墳の石棺裝飾にみられる大刀と刀子について、次章でふれる朝鮮三国時代の新羅・加耶地域にしばしば見られる子持大刀(図2の8・10)と関連することを示唆している。また、藤ノ木古墳の大刀についても鞘上に刀子を付属させる特有の形態について、刀装そのものは倭装大刀の特徴をもちながらも、大陸系大刀の特色も兼ね備えている点を強調している。¹³⁾

以上にみてきたようにとくに裝飾古墳の図文としての諸論では副葬品を図文化したものであるという見方とともに武器としての呪力とかそれによる避邪という理解が主となっていることが知られた。ただし、このような解釈によると考究を深化することが難しくなることもまた事実であって、すべてが辟邪の語によって、一元的に説明されることにもなりかねない。その点において、実物の子持大刀との比較のなかで示された関川氏の論点は重要な観点を提示しているといわねばならない。次章以下ではこのような視点から、図文の組合わせによる図案化という行為の中に、とくに石棺裝飾に込められた意図を導きだしてみたい。

3 親子大刀の図案化としての理解

とくに不知火海沿岸地域において広浦古墳石棺のように大刀や刀子が石棺裝飾に表現されることについては、前章でみたように副葬品の代替として図案化したものとする見解が多くをしめている。

ただし、広浦古墳石棺の裝飾にみられる大刀と刀子はそれらが重ねて表現されていることに特徴がみられるが、これがなにを意味するものなのかについては刀子そのものの意味とは分けて考えてみる必要がある。

ふたたび広浦古墳石棺の裝飾に目をむけると、すでに浜田耕作氏によって指摘されているように大刀と刀子の柄

の形態が類似していることに注目したい。さらにこれらの拓本についてとくに柄の部分の子細に観察してみると、大刀、刀子ともに「L」字形の独特の表現がとられ、これは類似というよりはむしろ明らかに意識的に同一の形態として彫刻していることが看取される。すなわち、広浦古墳石棺装飾の大刀と刀子は意図的に同一形式の柄を表したものの見て差し支えないものと考えられるのである。

もちろん、大刀や刀子の実物自体は不知火海沿岸や肥後地域だけに限らず、古墳の副葬品としては一般的なものであつて、この点を克服するために広浦古墳の大刀や刀子の形態周辺の装飾古墳における大刀や刀子の表現と比較してみよう。たとえば、五世紀代中頃のものともみられる竜北高塚古墳（図2の6）の石棺に円文などともにみられる刀子は柄の端部がやや下方に曲げられて表現されているが、広浦古墳の刀子ほどは極端に突出しない。また、千金甲三号墳の石屋形左側石に描かれている大刀は柄頭の部分が丁字形を呈する点で大刀の図のなかでは広浦古墳ともっとも類似するが、鞘の途中から突起状のものが出ている点が若干異なっている。すなわち、このように周辺にある石棺装飾との比較においても、細部において全く同一の表現をとる類例が多く認められないことから、広域における共通の表現規範が存在したわけではなかったことが想定される。

そして、なによりも広浦古墳の石棺装飾のなかにおいてさえ、浜田耕作氏の報告で「維和村第一石」とされたものに表されている刀子と「済々巖第一石」「済々巖第二石」の刀子とはとくに柄頭の部分の形態が異なっており、これらは別の形態の刀子であることを意識して刻されたものとみられることが重要である。いっぽう、広浦古墳石棺の刀子の形態は時代を同じくする滑石製模造品の一般的な表現とも異なっている。

これらを勘案すると広浦古墳石棺の大刀と刀子の彫刻は明らかに同一形態の柄頭を重ねて表現することに強い有意を感じるのであつて、さらにその細部表現の独自性からみても、広域における通有の表現ではなく、広浦古墳のみに表された固有の構図であると考ええる。すなわち、広浦古墳の石棺装飾にみられた大刀と刀子は同一の柄頭をも

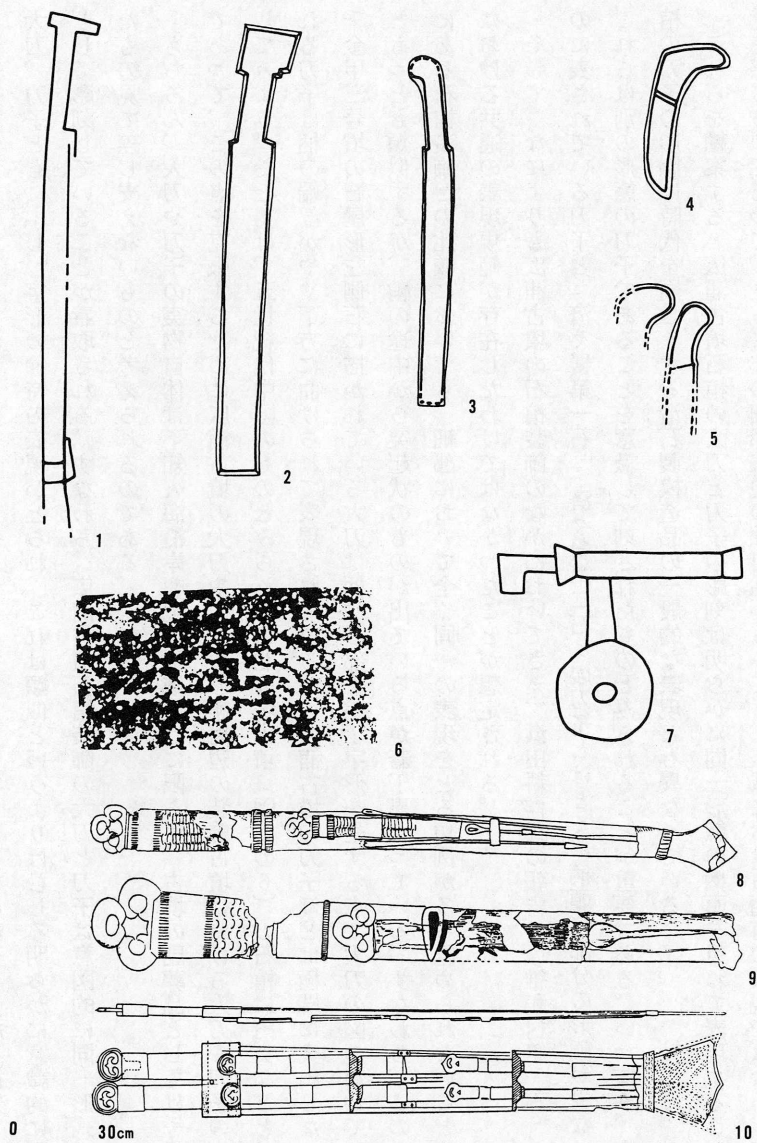


図2 肥後地域の装飾古墳に表された武器(1～7)と朝鮮三国時代の親子大刀

1. 千甲金3号墳 2. 石貫ナギノ8号横穴 3. 7. 大鼠蔵東1号墳
 4. 鍋田27号横穴 5. 大村13号横穴 6. 竜北高塚古墳
 8. 9. 慶州・金鈴塚 10. 大邱・達西面55号墳

つ組み合わせを重ね置くことにこそ、構図および表現上の含意があつたものである。それならば、この古墳の築造に際して、当時の人々が石棺の彫刻表現の構図にどのような意識を込めたのであろうか。

これを考える時に思ひいたるものが、前章で関川氏の示唆をひいてふれた日本では藤ノ木古墳出土の大刀などの他はほとんど知られない「子持大刀」との関係である。近隣地域でほぼ同期的にもちかいものとしては、主として新羅やその影響下にある加耶地域の古墳から出土するものであつて、三累環頭大刀や三葉環頭大刀をはじめとした大刀の鞘上に一般的には大刀と同じ形式の刀子が付属するものであつて、類例としては皇南大塚（九八号墳）南墳、同・北墳、天馬塚、金鈴塚、金冠塚、飾履塚、大邱・達西面五五号墳、皇南里破壊墳、梁山・夫婦塚などかなりの例数が知られている。これらの呼称については親子大刀とか母子大刀あるいは子持大刀などさまざまであるが、ここでは主刀と付属刀子の形式的同一性という観点から、もつともこれをよく伝える親子大刀の語を暫定的に使用しておきたい。（図2の8～10）

朝鮮三国時代の親子大刀を理解するうえで注意すべきは、まずその主刀が新羅では王や王族を含めた上位階層の墳墓から出土し、新羅の影響下にある加耶地域においても首長層を含む有力階層の古墳から出土することである。これについては穴沢咏光・馬目順一両氏による基礎論文があり、古墳の規模や出土状態から検討すると古新羅の古墳において副葬品としては三累環頭大刀がより上位に、これに次ぐものとして三葉環頭大刀が位置づけられると論じられた¹⁴。この考察はその後、新羅の環頭大刀の検討のみならず、古新羅古墳の階層性や被葬者像を論じる場合の基礎的な研究として位置づけられることになった¹⁵。

これらのことは、被葬者が新羅の王であることが想定される皇南大塚南墳となどの大型古墳を中心に出土していることにも端的に現れており、さらに古新羅古墳の階層構造を考察する場合に基準となる資料として三累環頭大刀、三葉環頭大刀が吟味されることとあわせて、これら両形式の環頭大刀が新羅では古墳の副葬品として被葬者の所属

した階層に深く関わる遺物であることが知られよう。そして、親子大刀も三累環頭および三葉環頭大刀の鞘に同形式的の小型刀を添えたものであつて、これを所持することはそれら両形式の大刀を所持することと同じかあるいはそれ以上に階層を顯示することになったことが想定される。¹⁶⁾

このような様相を広浦古墳の石棺表現の有意性と勘案した時、重ね置かれた大刀と刀子は新羅および加耶地域の有力階層のみが所持し、埋葬にあたつて副葬することのできる親子大刀を在来の図文と手法を用いて石棺に表現したものとみられる。そして、このように朝鮮半島との実際の通交を行った地域性に立脚した可視的表徴を通して得られた外的な権威に依拠することによつて、葬送行為のなかで被葬者の威儀を高からしめる意味を担わされたものと考えたい。¹⁷⁾ただし、このような裝飾が石棺の内面に施されていたことからみると、武器という在来の図文を使用した点には本来それらに期待された呪力が基盤にあつたことまでも否定するつもりはない。むしろ、葬送行為における武器に対するそれまでの精神性の上に重層する形で、このような新来の構図が彫り刻まれたのであろう。また、従来は九州における裝飾古墳の図文に外来的要素が流入するのは竹原古墳奥壁に描かれたいわゆる「牽馬人物図」や前室の「朱雀」と「玄武」かとみられる図文¹⁸⁾、あるいは珍敷塚古墳の壁画にみられる蟾蜍の図などを嚆矢とし、時期的には六世紀代に入つてから、とくにその後半頃から末葉にかけて顕著にみられるとされてきた。¹⁹⁾しかしながら、広浦古墳石棺裝飾図文が朝鮮三国時代の親子大刀を図案化したものであるという本論での考察に大過なしとすれば、早くも五世紀代には外来的な意匠を取り入れていたということにならう。

4 有明海沿岸における朝鮮半島系文物との関連

広浦古墳築造に前後する時期には周辺地域においても、きわめて特徴的な外来系遺物や裝飾要素などの存在が認められる。これらは不知火海沿岸のみならず広い意味での有明海周辺地域にみられるものであつて、古墳時代にお

ける地域間交流の一面を雄弁に物語る。すでに言及されているものも多いが、以下、とくに朝鮮半島との関係が顕著に現れているものをあげてみたい。

朝鮮半島に関係する遺物として、もつともよく知られるものが江田・船山古墳出土の金銅製冠帽であらう。(図3の2)これは側面形は烏帽子状を呈し、下縁部分の平面形が杏仁形になるもので、龍文の透彫が施されている。⁽²⁰⁾江田・船山古墳の出土遺物は複数の時期のものが存在するとみられているが、その中でもこの冠帽はもつとも古相を示すとされており、この場合、五世紀後半頃に位置づけられる。⁽²¹⁾東潮氏はこの冠帽と韓国の羅州・潘南面古墳群(全羅南道)のなかの九号墳出土品との間の強い関係を説いている。⁽²²⁾潘南面古墳群の存在する梁山江流域を含む韓国の全羅南道地域に対しては百済の王権が及んだ地域とは見ずに独自の地域的まとまりを重視して、馬韓の残存勢力あるいは慕韓と呼んで区別しようという見方がつよい。⁽²³⁾新村里九号墳出土の冠についても「慕韓の冠」として位置づける見解も示されている。⁽²⁴⁾また、毛利光俊彦氏はやはり韓国西南部でもやや北よりの全羅北道益山・笠店里一号墳出土の金銅製冠帽と江田船山古墳の金銅製冠帽とをいずれも同型式(毛利光氏の分類のIV類B種)に含めている。⁽²⁵⁾(図3の1)いずれにしろ、このような冠帽そのものあるいは形態や意匠も、やはり韓国西南部との交渉がなければもたらされることは考えにくい。また、同じく江田船山古墳から出土した須恵器蓋坏が百済からの搬入品とされることもある。⁽²⁶⁾

筑紫君磐井の墓とされている岩戸山古墳から発見されている石人のなかには冑を被った武人とされるものがあるが、この冑は縦矧細板から構成され、形態的には眉庇付冑に似るが眉庇部分が無く、額の中央にあたる部分が下方に突起している。(図3の3)頂部は欠失しており不明だが、全体の形態は日本の古墳時代に一般的な衝角付冑でありえず、また、眉庇付冑とも異なる。すなわち、この石人の着用している冑は日本の古墳時代に通有の形式のいずれにも該当しない。早くこれに着目したのは福尾正彦氏であって、石人頭部に刻されている冑と朝鮮三国時代

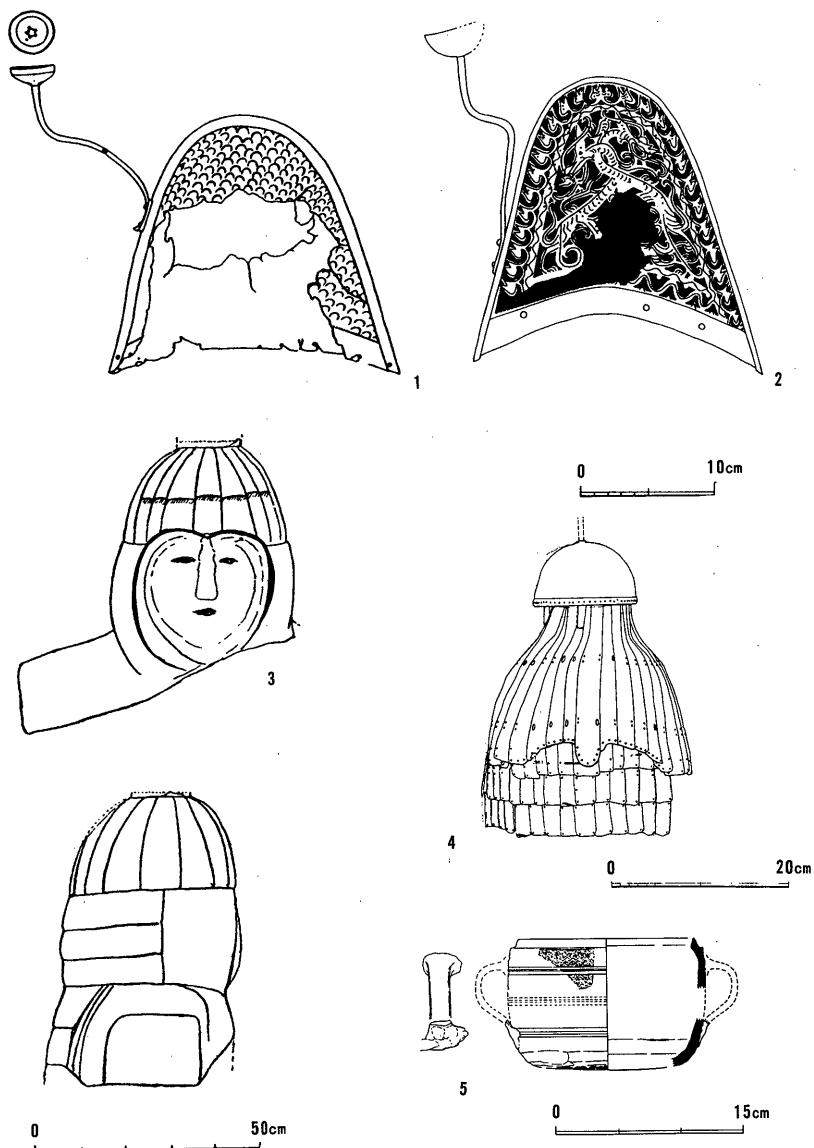


図3 有明海沿岸地域と朝鮮半島南部との関係を示す資料

1. 益山・笠店里1号墳出土金銅製冠帽
2. 江田船山古墳出土金銅製冠帽
3. 岩戸山古墳の武装石人
4. 釜山・福泉洞10・11号墳出土土冑
5. 物見櫓古墳出土の高靈系陶質土器

古墳から出土する縦矧細板革綴冑（図3の4）との形態的特徴の類似に注目し、さらに岩戸山古墳が筑紫君磐井の墓であるとして、六世紀前半頃の築造とみると、この時期の日本の冑は眉庇付冑または衝角付冑であつて、このような形式の冑は認められないことから、中国や朝鮮半島の出土資料や壁画に描かれた冑との関係を想定した。さらに、福尾氏は『日本書紀』継体天皇条に認められる新羅が磐井に「貨賂」すなわちまいないを送つて、新羅に制圧された南加羅・喙己吞を武力で回復しようとして派遣された近江毛野の軍を遮るように依頼した、という記事と関連させてこの種の冑を解釈している。すなわち、福尾氏は日本の古墳時代に朝鮮半島系の縦矧細板革綴冑が盛行しなかつたのは、五世紀代には眉庇付冑に発展解消されたことと、六世紀代には大王勢力に対する「反乱」者として記述されている筑紫君磐井の記事を勘案して、半島色の濃い冑を創出した磐井を象徴するものとして「反逆者の汚名」を付せられた冑であつたためであると説いたのである。⁽²⁷⁾

筆者はとくに磐井の勢力が使用した冑ということについては傍証がない点と、縦矧細板革綴冑に典型化される朝鮮半島系統の冑が日本列島では用いられた点について、五〜六世紀代を通じて整合的に説明される顕著な理由のないことから、このような考え方には首肯できない。『魏書』百济国伝の北魏・延興二年（四七二年）にみられる百济の蓋鹵王による孝文帝への上表文に、北魏と百济の間に高句麗がたちふさがり、朝貢の障害なつてゐることを訴えた部分には百济の西の国境付近の海で発見された死体が身につけていた衣服・道具・鞍・勒（轡）⁽²⁸⁾などから、彼らが高句麗人ではなく、高句麗によつて害された北魏の使者のものとして述べらるゝ⁽²⁸⁾く⁽²⁸⁾であり、すでにふれたように馬具が国際交渉における身分表示の証拠として使用されていることが注目される。すなわち、三年後に王城の南遷を余儀無くされる百济にとつて、中国史書に認められる北魏に対する唯一の通交であるという政治状況の特殊性が背景にあるとしても、上表文そのものの記載内容の信憑性とは別の次元で、この場合、馬具である鞍や轡によつて所属する国を同定する根拠として、国際交渉の場で用いられていることこそが重要視されるのである。⁽²⁹⁾

た、広開土王碑文にも戦闘によって甲冑や武器が鹵獲されたという記載があつて、そこに示された武器や武具の数量は実態としての記述かどうかは別としても、当時の国際間の紛争にともなつた武器や武具の戦場での獲得があつたことを前提としていたことは認めてよからう。⁽³¹⁾

このように日本の古墳時代に併行する東アジアの国際関係のなかで、武器や馬具なども含めた武具によつて、所属する国や民族を特定したり、また紛争のなかで武器や武具が獲得され、移動していたことが知られ、これらは武器や武具による当時の国際的な所属や属性の表徴となつていたことが知られるのである。すなわち、甲冑や馬具などの武具や武器には、それを用いる地域や集団の固有性を示す場合があることから、これらを身につけることによつて、結果的に所属や属性を可視的に表徴することになつたものと考えている。

よつて、ここでは岩戸山古墳武装石人の着装している冑の所属地域を推断することよりも、古墳時代中期中葉と後期中葉に朝鮮三国時代の冑の影響がごく一部にみられることはあつても、古墳時代後期にいたるまで、確実に韓国の堅矧細板冑と形式的に同類の範疇に入る冑は日本では出土していないことを勘案する場合、⁽³²⁾朝鮮三国時代の甲冑を実際に見聞することからしか岩戸山古墳の武人の冑は表現しえないことを強調したのである。

その他に近年になつて知られた資料をあげると、前方後円墳からなる特異な様相を呈する野津古墳群は火の地域の有力集団によつて営まれたものと考えられており、この古墳群中にある物見櫓古墳は初葬が六世紀前半頃とみられる方墳であるが、ここからは陶質土器片が出土している。そのうちの一点は器形や体部に施された波状文などから見て、明らかに高霊地域にみられる把手付有蓋埴の口縁部破片であつて、搬入品であることが確定である。⁽³³⁾ (図3の5) さうにこの古墳から出土した垂飾付耳飾りは垂飾部が連繫鎖で垂下飾りを下げる形をとり、高霊を中心とした加耶地域のものに類似し、先の陶質土器の出自を検証するものとなつてい⁽³⁴⁾る。

有明海沿岸地域における朝鮮半島との交渉の痕跡はとくに重視される事例のみに限つても、このような特徴的な

ものがあげられ、際立った特色としては、江田船山古墳の冠や岩戸山古墳石人の胃の表現などのように当時の政治勢力の中枢とみられる近畿地方などでは出土例がきわめて少ないか、または知られないものが存在することである。さらに、岩戸山古墳石人の胃は実際に実物を見たことがなければ描写しえない特徴をきわめて写實的に表現しており、この古墳を営んだ勢力は朝鮮半島と直接の交渉を行っていたことが容易に推測される。

このような論理は広浦古墳石棺の大刀と刀子の表現にも該当するのであって、親子大刀の実物を手元において彫刻したとは考えられないが、いっぽうでは親子大刀自体の認識がなければ表現しえないものであることも事実であろう。

有明海沿岸地域の地域勢力としての論及とともにその対外交渉や海上交通を勢力背景としたことについては、これまでもしばしばふれられるところであった。たとえば、白石太一郎氏は江田船山古墳の被葬者を朝鮮半島や日本列島各地にのびる海上交通の担い手と位置づけ、山尾幸久氏は高句麗と百済の戦争や北魏の山東半島領有により、北回りの航路が使用できなくなった五世紀半ばに有明海から直接江南へ向かう航路が重用されることとなり、その結果、有明海沿岸の豪族が直接に「ヤマト王権」と関わりをもったと述べている。³⁷さらに、九州の壁画古墳の出現の契機として筑後川、菊池川流域の首長の朝鮮半島への出兵などとの関係から説明する論もみられる。³⁸近年においては白石太一郎氏が五世紀中葉以降の有明海沿岸地域において本格的な装飾古墳が成立するのには朝鮮半島からの刺激を受けながら、墓室を彩色で装飾するというアイデアを取り入れ、伝統的な呪術的図文を彩色によって描いたと論じている。さらにこの時期に東アジア諸地域との実際の外交や交易活動を担当したのは有明海沿岸各地の中小首長層であるとも述べており、³⁹このような評価は本論での広浦古墳石棺装飾の図案の考察と抵触するところがない。また、これまでの装飾古墳研究のなかで、竹原古墳や珍敷塚古墳などに代表される「大陸系」図文とされたものの他に、六世紀初め頃の築造とされる番塚古墳の木棺に付けられた蟾蜍を表した飾金具やそれよりはさかのぼると

考えられる江田船山古墳の飾金具に点刻された蟾蜍など、⁽⁴⁾「大陸系」とされてきた文様がより古い時点で流入していたことが明らかになってきている。これらはもちろん壁画や石棺・石障などの装飾とは異質な対象に表現されたものであるにしろ、当然ながら意匠や図文そのものは、これまで装飾古墳の「大陸系」図文といわれたものと共通点が見られるのであって、従来考えられていたよりはさかのぼる時期に朝鮮半島または中国大陸から図文や図案として意匠などを取り入れていたことが想定されるようになった。広浦古墳を五世紀代でも後半には下らないとみるならば、さらにさかのぼる時点で朝鮮半島の文物を図案化していたものとして評価されよう。

結 語

本論では天草に所在した広浦古墳の石棺に彫刻された大刀と刀子の形式や組合わせや配置を検討し、この構図が新羅やその影響下にある加耶の古墳から出土する親子大刀を在来の図文を用いることによって図案化したものであると論じた。その意味は埋葬に外的権威を加えることによって、朝鮮半島との実際の交渉に携わった被葬者の威儀を高からしめることと想定した。また、実物の親子大刀は古墳時代を通じて日本列島ではほとんど出土例がないことや、岩戸山古墳の武装石人や江田船山古墳の金銅製冠などの在り方を傍証として勘案する時、このような外来的な意匠をも含めた有明海沿岸地域に認められる朝鮮半島系統の文物の移入そのものが、それらの諸地域と朝鮮半島の諸地域との直接の接触によつてのみ生ずるものであることを推定した。また、広浦古墳石棺装飾に対するこのような評価に大過ないならば、これまでの六世紀に下ると思われてきた北部・中部九州地域の装飾古墳における外来的な図文の流入は五世紀代にすでに有明海沿岸諸地域では始まっていたことになる。

これまで北部・中部九州における装飾古墳の分析では図文そのものの類似のみによつて、中国や朝鮮半島からの文様やその背景となる思想の流入が検討されてきた。本論では画題のもとになる図案や意匠に視点を移して、その

原形を推定し、それがもつ固有の特徴が在来の装飾技法や図文によってどのように表されているかを分析した。文様としての形態の類似を説く場合は恣意的な解釈は避け難い面があるために、筆者はあくまでも図文そのものの特徴の個別的な分析に立脚する一種の図像学的方法によることが基本的となると考えている。このような方法を用いる具体的かつ個別的な対象として、これまでは主として高句麗壁画古墳の構図に対して、中国史料などをを用いて行ってきた⁽⁴⁾。今後は本論における検討を起点としつつ、日本および中国の壁画や装飾についても検討を行い、それによって東アジアにおける墳墓装飾の相関的な位置づけと評価につなげていきたいと考えている。これに備えて、本論に対する多方面からの示教をまつ所以はここに存する。

注

- (1) 以下、広浦古墳に関する記述は次の報告による。
浜田耕作「肥後国天草郡維和村の古墳」『九州における装飾ある古墳』京都帝国大学文学部考古学研究报告第三冊 一九一九年
- (2) 高木正文「肥後における装飾古墳の展開」(『国立歴史民俗博物館研究報告』八〇) 一九九九年
- (3) 乙益重隆「広浦古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』(熊本県文化財調査報告 第六八集) 一九八四年
白石太一郎「装飾古墳にみる他界観」(『国立歴史民俗博物館研究報告』八〇) 一九九九年
- (4) 浜田耕作「肥後国天草郡維和村の古墳」(前掲)
- (5) 浜田耕作「装飾模様の種類と其の意義(上)」『肥後における装飾ある古墳及び横穴』京都帝国大学文学部考古学研究报告第一冊 一九一七年
- (6) 乙益重隆「広浦古墳と大鼠蔵東麓古墳」小林行雄編『装飾古墳』一九六四年 平凡社
- (7) 乙益重隆「広浦古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』(前掲)
- (8) 斎藤忠「装飾古墳・図文からみた日本と大陸文化」日本書籍 一九八三年 一二一〜四頁。
- (9) 江上敏勝「大鼠蔵東麓1号墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』(前掲)
- (10) 高木正文「肥後における装飾古墳の展開」(『国立歴史民俗博物館研究報告』八〇) 一九九九年
- (11) 白石太一郎「装飾古墳にみる他界観」(前掲)
- (12) 小林行雄「日本考古学概説」東京創元社 一九五一年 一九四〜五頁。

(13) 関川尚巧「IV 刀剣類について」奈良県立橿原考古学

研究所編『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』一九五五年 二六五頁の「子持大刀」の項で関川氏は「国内ではほとんど類例を見ないが、熊本県・広浦古墳の裝飾石材に刻された、おそらく楔形と思われる把頭をもつ大刀の鞘に刀子の表現をみることができ、日本ではほとんど普遍化しなかった様式ではあるが、こうした例が存在する限り、子持大刀がまだ存在することが想定されよう」と示唆し、広浦古墳石棺裝飾を日本における親子大刀の典型として位置づけている。

(14) 穴沢咏光・馬目順一「古新羅墳丘墓出土の環頭大刀」

『朝鮮学報』一二二 一九八七年

(15) 朴普鉉「威勢品からみた古新羅社会の構造」慶北大学校大学院博士学位論文 一九九五年*、李熙濬『4-5 世紀新羅の考古学的研究』ソウル大学校大学院博士学位論文 一九九八年*

(16) この他に新羅の「親子」大刀を主とした大刀や刀子については、己の身代わりとして近親者から死者へ手向けられたものとする見解がある。村上英之助「古新羅の刀子」(『たたら研究』二九) 一九八八年 示唆に富む見方であるが、今後、確実な論点をもとめて吟味してみたい。

(17) 別の背景として、これ以前に不知火海沿岸さらに広義の有明海沿岸地域で行われていた大刀やとりわけ刀子そのものの呪的な意味づけがあったことも十分に考えられる。たとえば前期後半の古墳として知られる宇土市の向

野田古墳では竪穴式石室の壁面沿いすなわち舟形石棺の周囲に三七本の刀子が置かれていた。宇土市教育委員会『向野田古墳』一九七八年

このような刀子の多数埋納は但馬など他地域でも例があり、五五本の刀子が出土した天馬塚など新羅古墳との関連から考究する視座をもつべきであるとし、さらに古墳出土品のなかの刀子の意味の再検討を促す示唆がある。森浩一「天日槍集團の足跡」『甞る古代への道』徳間書店 一九八四年 この視点は重要であるが、本論の主題からははずれるため、今後、上記の問題とともに合せて論じてみたい。

(18) ただし、「朱雀」とされているものを体部が黒いことから「金鳥」とし、「玄武」とされているものを日輪とみて、双方あわせて日像を表したもので、全体としては朝日の差し上る海辺の祭祀場出の龍媒説話を表した壁画とみる解釈もある。

和田萃「四神図の系譜」(『国立歴史民俗博物館研究報告』八〇) 一九九九年

(19) 斎藤忠「裝飾古墳・図文からみた日本と大陸文化」(前掲)、白石太一郎「裝飾古墳にみる他界観」(前掲) など。

(20) 冠の詳細な分類については毛利光俊彦「日本古代の冠―古墳出土冠の系譜―」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所 一九九五年を参照。

(21) 江田船山古墳の概要や研究史をまとめたものとして熊本県玉名郡菊水町『江田船山古墳』一九八〇年が有用

である。

- (22) 東潮「三国・加耶時代の冠帽と身分制」『高句麗考古学研究』吉川弘文館 一九九七年

新村里九号墳の年代観の研究史および詳細な検討については、朴普鉉「金銅冠よりみた羅州新村里九号墳乙棺の年代」(『百濟研究』二八)一九九八年* 朴普鉉氏は武寧王と王妃の金工品との比較より、新村里九号墳の墳丘が六世紀初頭に機能を終えたものとみている。

- (23) 一九九〇年代より韓国ではこのような見方がなされるようになっており、関連論考は数多いが、三世紀頃の「前期馬韓」の時期や榮山江流域の墳墓や地域的特質とそれぞれまとめたものとして近年刊行の下記の文献をあげておく。

東潮「榮山江流域と慕韓」考古学研究会編『展望考古学』一九九五年

朴淳発他「馬韓史研究」忠南大学校出版部 一九九八年

- * 崔盛洛編著『榮山江流域の古代社会』学研文化社 一九九九年*

- (24) 東潮「三国・加耶時代の冠帽と身分制」(前掲)

- (25) 毛利光俊彦「日本古代の冠—古墳出土冠の系譜—」

(前掲)

- (26) 中村浩「江田船山古墳出土須恵器(陶質土器)」『研究入門須恵器』柏書房 一九九〇年

- (27) 福尾正彦「岩戸山古墳出土の冑着装円体石人頭部に關

裝飾古墳の画題からみた地域間交渉の一側面

する若干の考察」(『古文化談叢』二一)一九八九年

- (28) 『魏書』百濟国伝「去庚辰年後、臣西界小石山北国海中見屍十余、并得衣器鞍勒、視之非高麗之物、後聞乃是王人来降臣国。長蛇隔路、以沈于海、雖未委富、深懷憤恚」

- (29) 門田誠一「装身具と武器の語る国際関係」『海からみた日本の古代』新人物往来社 一九九二年

- (30) 広開土王碑・第三面第四行二一字〜第五行二四字「十七年丁未教遣步騎五万□□□□□□□□□□師□□合戰斬殺蕩尽所獲鎧鉀一万領軍資器械不可称数」

釈文は武田幸男「『広開土王碑文』釈文」『高句麗史と東アジア』岩波書店 一九八九年によった。

- (31) 門田誠一「装身具と武器の語る国際関係」(前掲)

- (32) 内山敏行「古墳時代後期の朝鮮半島系冑」(『財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター研究紀要』

二)一九九二年

- (33) 竜北町教育委員会『野津古墳群Ⅱ』一九九九年

- (34) 三木ますみ「物見櫓古墳出土の垂飾付耳飾について」『野津古墳群Ⅱ』(前掲)

- (35) 有明海沿岸地域の地域勢力について端的に論じたものとして、柳沢一男「共通の墓制が環有明海連合政權の存在を示す」『古代天皇と巨大古墳の謎』(『歴史読本』三巻六号)一九八六年がある。ただし、そこで論じられているような「連合政權」の意味と実態については評価の分かれるところであろう。

- (36) 白石太一郎「江田船山古墳の被葬者像」『古墳の語る古代史』(歴博ブックレット⑥) 国立歴史民俗博物館振興会 一九九八年

- (37) 山尾幸久「倭国の乱・磐井の乱・壬申の乱」都出比呂志・田中琢編『古代史の論点 4 権力と国家と戦争』小学館 一九九八年

- (38) 佐田茂「彩色壁画の出現と筑後の彩色壁画古墳」(『肥後考古』八) 一九九一年 ただし、筆者は九州における壁画古墳の創出の契機を「朝鮮半島への出兵」として一元化し、限定することはできないと考えている。

- (39) 白石太一郎「装飾古墳にみる他界観」(前掲)

- (40) 九州大学文学部考古学研究室「番塚古墳―福岡県京都郡苅田町所在前方後円墳の発掘調査―」一九九三年

とくに報告書中の高久健二「木棺・蟾蜍形飾金具」を参照。

- (41) 小田富士雄「装飾古墳にみる大陸系画題」(『古文化談叢』四〇) 一九九八年

- (42) 門田誠一「高句麗壁画古墳に描かれた仏教関連の行事

について―「百戲伎楽」図の意味と系譜を中心として―」『朝鮮古代研究』二 一九九九年 その他。

(末尾に*を付したものは韓国文)

図出典

- 図1、図2の6―九州における装飾ある古墳」(前掲)、図2の1、5、7―『熊本県装飾古墳総合調査報告書』(前掲)、図2の8、9―梅原末治『慶州金鈴塚塚飾履塚発掘報告』(『大正十三年度古蹟調査報告』) 一九三二年、図2の10―小泉顕夫・野守健『慶尚南道達城郡達西面古蹟調査報告』(『大正十二年度古蹟調査報告』) 一九三一年、図3の1―韓国文化財研究所『益山笠店里古墳発掘調査報告書』一九八九年、図3の2―中村潤子『騎馬民族説の考古学』森浩一編『考古学その見方と解釈』上 筑摩書房 一九九一年、図3の3―福尾正彦「岩戸山古墳出土の冑着装円体石人頭部に関する若干の考察」(前掲)、図3の4―釜山大学校博物館『東萊福泉洞古墳群Ⅰ』一九八三年、図3の5―『野津古墳群Ⅱ』(前掲)